日本の近代化遺産「敷根火薬製造所跡」

敷根風土記編纂資料

平成２０年４月２０日（日）
敷根風土記編集委員　神宮司耕二

１　敷根火薬製造所跡

（１）歴史的背景

１５４３年に種子島に鉄砲が伝わってから、薩摩藩では鉄砲に強い関心をもっていました。加治木の黒川岬の戦い（島津貴久と肝付氏）や岩剣城の戦いなどで、鉄砲が使われていて早くからその重要性には着目していたようです。その後太平の世をむかえ、鉄砲への関心が薄らぐ中、薩摩では、「火柳」花火などを作り火薬は製造されていました。

１８５３年のペリーの来航で、銃の進歩に驚き、火薬の必要性を強く感じた島津斉彬は集成館事業で、大量の火薬製造にとりかかりました。そのとき、鹿児島の「滝之上の火薬工場」のほかに、敷根にも火薬製造所が作られました。この火薬製造所の指揮監督は「伊勢仲左衛門」という人です。薩藩海軍史によると、「大隅国敷根に火薬製造所を建設し、伊勢仲左衛門を見聞役とせり」と記載されています。伊勢は明治８年に医師神社に石灯籠、火薬製造所近くに記念碑（？資料参照）を残しています。（現在も残っている）

火薬及び鉄砲関係の年表

○１５４３（天文１２）年　種子島に鉄砲が伝わる（南浦文之の鉄砲記）
○１８１８（文政１）年　滝之上火薬製造所（黒色火薬）
○１８４９（嘉永２）年　火薬製造方法を様式に変更
○１８５１（嘉永４）年　島津斉彬１８代藩主となる　・集成館事業
○１８５３（嘉永６）年　無煙火薬の製造
○１８５６（安政３）年　斉彬雷管銃の製造
※起爆剤にアルコール（フランスで発明）
○１８５８（安政５）年　・島津斉彬死亡
・谷山に作硝所を作る
○１８６３（文久３）年　・薩英戦争
・敷根火薬工場が造られる
○１８７７（明治１０）年　・西南戦争
・敷根火薬工場が破壊される
※軍艦「春日」の艦長他乃木中尉らが上陸し火薬庫焼き払う

医師神社石灯籠
（伊勢仲左衛門献灯）

島津斉彬は外敵に備え「富国強兵」策をとり、集成館事業を推し進めていきます。その最も重要なポイントは「火薬」の製造だったと考えられます。その「火薬」製造の拠点として敷根が選ばれ、多額の資金をつぎ込んで大工場が建設されました。まさに、日本の近代化は「敷根」からスタートしたのです。

（２）敷根に火薬工場が施設されたわけ

残されている絵図や薩摩海軍史にただ一枚だけ掲載されている写真などをみると、敷根火薬工場はかなり大規模な工場であったようです。そのような大工場がこの敷根につくられた理由について考えられることをあげてみると次のようなことがあげられます。

１・敷根は湾奥で外敵やスパイからの守りに適していた。（地理的好条件）
２・動力源としての水が豊富に得られる。（高橋川　火薬の原料である「硝石」等を砕くためにたくさんの水車「８馬力」が動いていた）
３・原料や製品の輸送が便利だった。（海上輸送）（霧島からの硫黄の輸送）等
４・万一事故が発生したときの類焼が防げた。（適当に人家から離れていた）
５・機密漏洩の心配のない場所。
６・歴史的背景（島津斉彬の先見性）

（３）敷根火薬工場はどんな工場だったのだろうか

敷根火薬工場は、前にも記したように当時最も進んだ洋式工場でした。島津斉彬は最も進んだ先端技術を導入し、この火薬工場をつくりました。敷根は滝之上火薬工場を補う意味があったのだ思われます。斉彬の集成館事業の最重要拠点だったのではないでしょうか。

敷根火薬工場の絵図
（鹿児島市・ふるさと維新館）

敷根火薬工場は、１８６３（文久３年）年に建設され、西南戦争（１８７７年）で焼き討ちされるまでの１４年間続きました。（薩英戦争で英国式火薬の威力を痛感する）

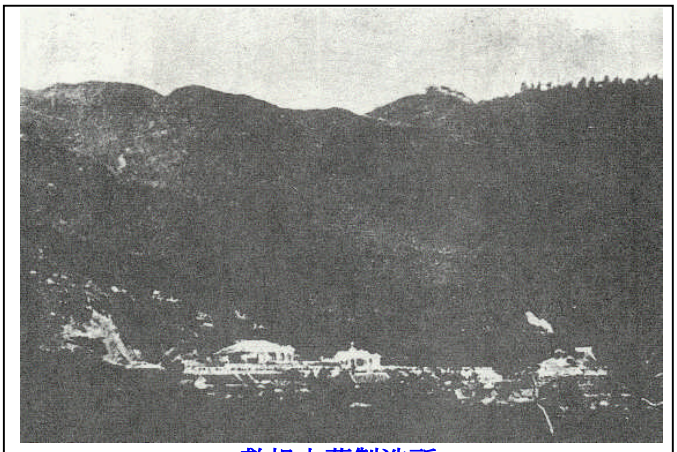
敷根火薬製造所では、８基の水車があり、約１２０人の人が働いていました。実に近代的な大工場であったといわれています。年間４２トンの生産があったということです。

ここで作られていた「イギリス式黒色火薬」は、硝石７５％、硫黄１０％、木炭１５％の割合で混合され強力な威力を発揮したと言われています。（薩英戦争以後オランダ火薬から変わる）

原料の、**硫黄**は南西諸島の硫黄島産、霧島産を使用し、**木炭**は粉末に加工した麻、柳の木の木炭を使用しています。**硝石**は、谷山や各地に硝石工場が作られていました。硝石の大量の入手の役割を担ったのは、富山の薬売りではなったかと考えられます。越中富山売薬組合の古書には、「薩摩組」と言われた売薬人たちが飛騨高山より買い集めた硝石を荷薬として運び込んだ、という記録が残っています。

谷山硝石工場跡地
（小松原・永田川沿い）

遠藤和子著「富山の薬売り」という本に薩摩での薬売りの働きが記されています。それによると、越中売薬商人たち（薩摩組）は、激動の渦に巻き込まれる中で、藩のために献身的な働きをしているようです。その中心になった人が「金森五兵衛」という人で、島津斉彬とも謁見し、寺田屋騒動や鳥羽伏見の戦いなどで重要な役割を担っていたように記されています。彼らが硝石の輸入にかかわっていたことは容易に推察できます。

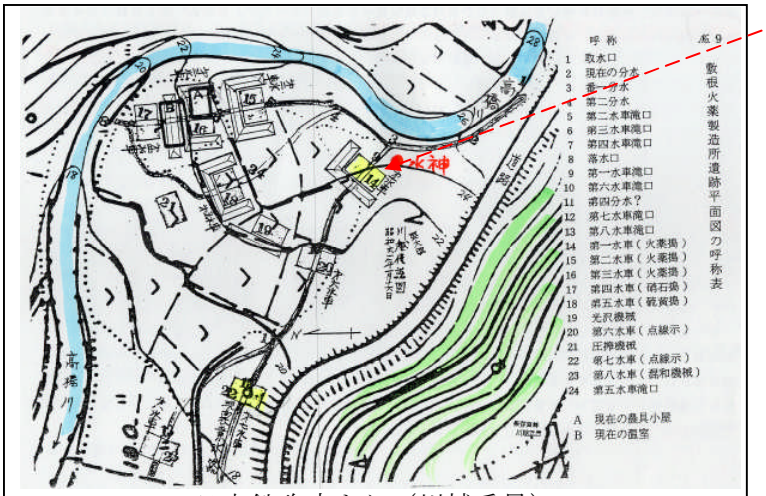


敷根火薬製造所

硝石（硝酸カリウム・ＫＮＯ２）が人為的に作られるようになったのは、秀吉が朝鮮出兵の際連れてきた捕虜から聞き出し、前田藩によってそれが確立されたと言われています。

○敷根火薬製造所（薩藩海軍史より）

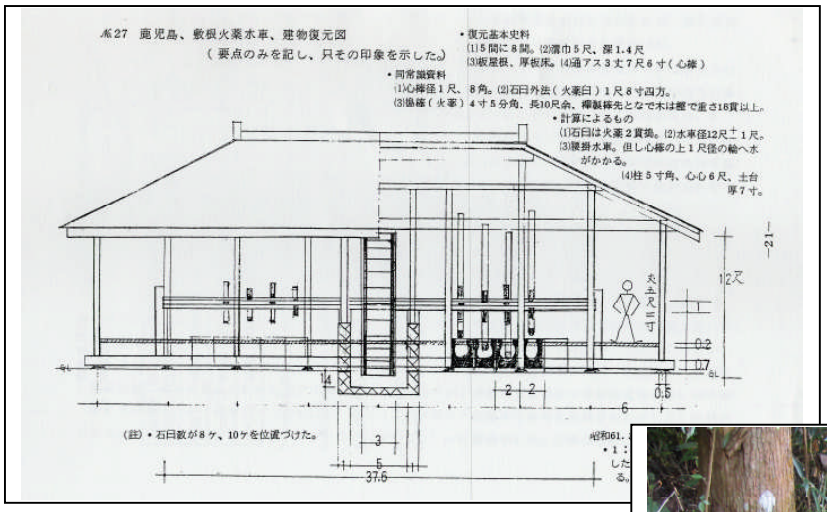
左の写真は唯一残されている写真です。ここには、かなりたくさんの建物があり、広い範囲に広がっていて、まるで白亜の殿堂が立ち並んでいるようです。次の地図と比べてみてもその規模の大きさが分かります。

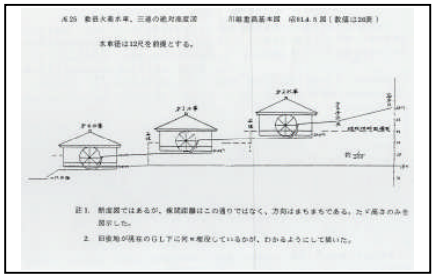


日本鉄砲史より（川越重昌）

●第一水車跡（今でも石垣や水車用の滝が残っている）

○ どんな建物だったのだろうか





・二つの図は、日本鉄砲史（川越重昌）によります。このような建物が建てられていたと想像されます。

○ この近辺で大きな石臼が掘り出されていますが、この石臼をみても工場の規模の大きさが想像されます。現在その石臼は８個あり、草藪の中に放置されている状態です。何らかの方法で保存し展示するようにしたいものです。
右の写真の石臼は直径が凡そ７０cmぐらい、高さは１５cmと２５cmなどまちまちです。それぞれの形状が異なっていて、いろいろな用途があったと思われます。川越重昌の調査報告書には「敷根の石臼は記録にも現物も見あたらない」と記述されている。もし、この石臼がそのとき掘り出されていたらもっと違った調査報告書となっていたかも知れません。

○ エンシュゴヤ、エンシュグラ等今も残る地名。エンシュゴヤ（煙硝小屋・火薬倉庫）は、敷根火薬製造所の東側にありましたが、何の痕跡も残っていません。（資料の写真）

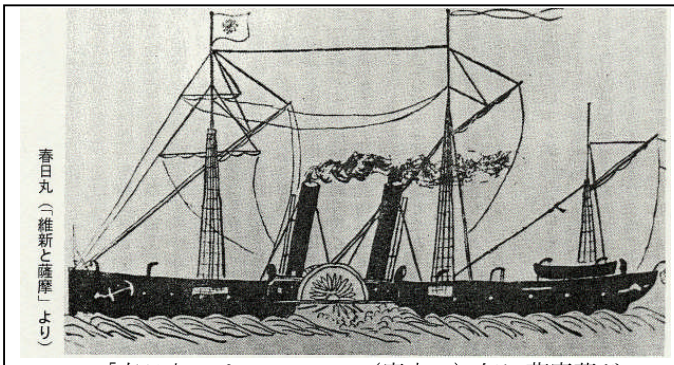
（４）敷根火薬工場の役割（その後）

南浦文之（１６世紀末～１７世紀）、島津義久の時代に活躍・儒学者・大竜寺の開基）の「鉄砲記」によると、「鉄砲が種子島に伝わった時種子島時堯は、鉄砲を求めその使用法を伝授せしめ、家臣の篠川小四郎をして**妙薬**の製造方法を習得させた。」とあります。薩摩藩の火薬製造はその時代に始まり、それから３００年余りたって敷根火薬工場に引き継がれているのですが、１８７７（明治１０）年の西南戦争でその役割が終わります。（南浦文之のお墓は加治木、安国寺にあります）

薩藩海軍史（下）に「春日艦々歴」があり、**春日丸**の航海日誌に次のように記されています。

明治１０年　３月６日　午前零時５０分　長崎出航
　　７日　午前８時　　鹿児島著艦
　　９日　鹿児島港祇園他４箇所の台場取毀被命
　　１０日　午後１時７分　　**鹿児島出艦同３時８分敷根へ達し同所製造所を焼捨る午後９時鹿児島へ帰艦**

この航海日誌によると、春日丸は明治１０年３月１０に敷根沖に来て、伊東指揮官ほか乃木中尉、二階堂中尉らが上陸し敷根火薬製造所のほとんどを焼き払っています。（抵抗はなかった）



「春日丸」は、１８６７（慶応３）年に薩摩藩が長崎でイギリスから購入している。指宿の豪商の浜崎太平次から購入費の半額（８万両）を調達してもらい、１６万両で購入。
３００馬力、１６ノットという、当時としては最速最新鋭の軍艦だった。後に薩摩藩はこの艦を幕府に献上していて、北越戦争や函館戦争で活躍している。井上馨や東郷平八郎なども士官として乗りこんでいた。（鹿児島大百科事典より）

このようにして、偉容を誇った敷根火薬工場は、わずか１４年間でその幕を下ろすことになります。

しかし、薩摩藩はもちろん日本の歴史の中で果たした役割はたいへん大きかったと思われます。敷根火薬製造所で作られた火薬が明治維新の原動力となり、日本の近代産業の発展に尽くしたのです。（痛ましい出来事もあります。たとえば、会津城が敷根の火薬で炎上し、白虎隊の自決となったこと等）

西南戦争後、敷根火薬製造所の指導者や技術者たち熟練工６人が「海軍火薬製造所」（東京目黒）に迎えられ、新政府の最初の火薬工場のリーダーとなっていくのでした。此処で作られた火薬が日清・日露戦争で威力を発揮し、日本の近代国家建設の原動力となりました。（「火薬」は戦争とか殺傷など、マイナスイメージもあり、詳しい歴史的研究があまりありません。しかし、火薬は土木産業などの発展に重要な役割を果たしています。）

その後、工場はなくなりますが、水車小屋は民間に払い下げられ、昭和の半ばまでは水車が１台残り、精米、製粉工場などに利用されていたということです。

このように日本の近代化に重要な役割を果たした「敷根火薬製造所跡」はあまり注目されず眠っているように感じます。過去何人かの学者の方々（平田信芳氏・平成元年、川越重昌氏・昭和６１年、等）が調査しておられますが、もっと光をあて、徹底的な発掘調査が望まれます。

鉄砲史研究より（川越重昌）

○目黒の火薬工場跡地は全く地成らしされてその跡形もないが、敷根火薬工場跡がこうもはっきり残っていることは軌跡ともいうべきである。

○敷根火薬製造所は、洋式製法を更に取り入れた最も進歩した大工場であることは間違いない。全国二六０余藩及び幕府のそれを遥かに越す突出した工場であった。

○敷根の本局であった滝之上製造所跡は何も残っていない、敷根のこの跡は現存する全国で唯一の火薬製造所跡である。しかもそれは、種子島鉄砲伝来以降でも唯一の現存遺跡である。

かごしま川由来考
平田 信芳

高橋川（霧島市）

二級河川、長さ四・七キロ。水源は牧之原にある県畜産試験場北側の谷。北西に流れ上之段で西に向きを変え、敷根の脇元で鹿児島湾に注ぐ。河口から約八百㍍の小字彦田に薩摩藩の火薬製造所跡がある。鹿児島市の滝之上火薬製造所が本局、敷根は分局だった。敷根の工場は文久三（一八六三）年の薩英戦争前後に建設され、薩英戦争後イギリス式に製造法を切り替えたとみられる。二カ所の火薬工場が明治維新の武力的背景だった。滝之上工場跡は８・６水害で壊滅したが、敷根は埋蔵されたまま。保存を望む。

○南日本新聞より（平田信芳）

参考資料

伊勢仲左衛門　　（竈神社　主夜神社）

・敷根火薬製造所の取締役

医師神社に石灯籠（1ページ）を献灯（明治8年）している。また、竈神社跡地（？）に記念碑（右）があり、その側面には、下のように銘記してある。

この碑には、西南戦争の時と思われる弾痕がある。

明治八年乙亥壱日
伊勢仲左衛門
鮫島善兵衛
河野　新助
中馬　〇〇

〇第一水車小屋跡（高橋川からの水路）の上

最近の篤姫ブームのせいか、火薬庫跡地記念碑の横に上のような看板が立てられ、記念碑の年号の間違いも訂正されているようです。

☆かごしま探検の会作製（ＮＰＯ　東川隆太郎氏）

※「歴史力」（地域の有形無形の歴史資産を生かす力）を育てよう（南日本新聞より）

（参考文献）
・古川繁郎様研究資料　・国分郷土史　・敷根火薬製造所跡（平田信芳）・鹿児島市水道史
・モシターン（伊地知南編）　・薩藩海軍史（上）　・鉄砲史研究「１７７号」（川越重昌）
・谷山歴史散歩　・旧谷山市史　・薩摩島津氏（三木靖）　・富山の薬売り（遠藤和子）
・鉄砲記（南浦文之）　・鹿児島県大百科事典　・平凡社日本地名大辞典「鹿児島県」
・インターネット（ふるさと種子島・花火と火薬の歴史・わくわく探検記）

参考資料

○火薬倉庫のあった所（エンシュゴヤ）

○第一水車小屋のあった所

水車が今でも取り付けられるような状態で石垣（周辺も）や水路がそのまま残っている。（エンシュヤマ）

鉄砲記（南浦文之）

・・・・・是歳重九之節日在辛亥涓良辰試入妙薬與小團鉛於其中萱一小白於百歩之外放之火則其殆庶幾乎、時人始而驚中而恐而畏之終而翁然亦曰願學、時堯不言其價之高而難及、而求蠻種之二鐵砲以為家珍矣、其妙薬之擣篩和合之法、令小篠川小四郎學之、・・・・

百数十年前に日本の近代化の礎となった「敷根火薬製造所跡」今では豊かな田園地帯が広がり、静かに佇んでいます。

○ 南日本新聞より（昭 61・8・23）

「地方記者の目」（川越氏の調査報告が発表されたのを受けて）・・・略・・・・・　敷根火薬製造所は近代日本火薬史上の重要ポイントいうだけでなく、鹿児島市磯と並び我が国の近代工場生産業を開く曙でもあった。

上野原テクノパークが新時代の工場群であるとすれば、百余年前、同じ地で国分の人々が最先端技術と格闘した。国分（敷根）には、誇り高い産業技術の歴史がある。